

ボトルフラワーアトリエ Ryoko 代表

塚園涼子

感性に響くものを
追求し続ける
自然体の
ボトルフラワー作家



くるめ南部商工会

「ボトルフラワーアトリエ Ryoko」

生花をそのままの形と色を保ったまま残すことができる「ボトルフラワー」の教室を開催し、
趣味で楽しむほか、ビジネスに活かしたい人を育成する。
さらに、作品の販売やオーダーも受け付けており、オンラインストアも展開している。

☎ 090-4349-9556

住所 / 久留米市荒木町荒木874-2



Three Questions

匠人 たくみびと
3に聞く
のこと

1 リラックスタイムの楽しみは？

近所を散歩することですかね。運動のためでもあるんだけど、頭を真っ白にしてリセットできるから、もう何年も続けています。1回で40分くらい歩きますよ。

2 ご自身の好きな花は何ですか？

桜はやっぱり好きですね。柔らかい色が人気だしね。あと青くて可愛いネモフィラも好きです。

3 休みが取れたら何をしたいですか？

ヨーロッパを旅行して、フランスに長く滞在したいですね。コンサートや演劇も見たいし、やりたい事がいっぱいいます。

美しさに一気に魅せられて

「ボトルフラワー」と涼子さんの出会いは、30数年前に遡る。近所の知人の家で、生花そのものの優美な色・形を保ったままの花のボトルフラワーを見かけたのだ。

「ガラスに入ったキレイな花を見かけて、その瞬間はもう目からウロコでした。もともと花が好きでしたし、フラワーアレンジメントもしてたけど、本当に驚きで。これ本当に生花ですかって」。ドライフラワーのような褪せた色でなく、鮮やかに咲いたまま時が止まったかのような美しさに一瞬で惚れ込んだという。それからは育児や仕事の合間にその知人の家に通ってボトルフラワーのイロハを教えてもらった。たまたま勤めていた会社がなく

なったこともあって、友人からの勧めでボトルフラワーの教室を開くことに。

「当時は普通の会社員でしたし、ボトルフラワーを仕事にするとは思ってもみなかったですけどね」と振り返るが、この出会いがボトルフラワーを広めていく活動の始まりになる。

ボトルフラワーに欠かせないガラスケースを調達しようとガラスを取り扱っているお店の社長に相談すると、その人もボトルフラワーに魅了されて協力してくれることになり、教室の開講はトントン拍子で進行。生徒も続々と増え、ホームページを作ると全国からも生徒が集まった。涼子さんが動き出したことで、ボトルフラワーの輪はどんどん広がりを見せたのだ。

どこまでいっても自然体

ふとしたきっかけでボトルフラワー普及の旗振り役となった涼子さんは、全国各地を飛び回る一方、代表者として肩書を持つとフラワーアレンジメントの資格を取得したり、「世界らん展」で賞を獲ったりと精力的な日々を送った。

「だって気づいたら代表者としてボトルフラワーの普及活動に専念していたからね。会社勤めが続いていたら、やってないですよ。本当に予想外でも子どもの時から花が好きでしたから」。普通ならば必死で努力するようなことを、一つの通過点としてサラリとこなしてしまう。その行動力の根底にあるのは花が好き、ボトルフラワーが好きという思いだけだ。ボトルフラワーの認知度が高まる

何歳になっても好奇心が大事でしょう

この仕事をしていたら、そう思うようになった

Profile 塚園 涼子さん

ボトルフラワーとの衝撃的な出会いを契機として、1998年にボトルフラワーの教室を立ち上げ、自身もコンテストやイベントへの参加を通じてボトルフラワー普及に尽力している。花の鑑賞や栽培のほか、ファッションやアート鑑賞なども好き。



につれ、乾燥剤(シリカゲル)で手軽に楽しめる方法がテレビで紹介されたことがある。手軽な分、涼子さんから見れば仕上りの良さには疑問が残るものだった。「趣味としてはいいんですけど、商品化するんだったら雑に扱ってほしくない。繊細で美し

い花だから、美しく価値のあるボトルフラワーに仕上げた欲しいんです」。作品に使うために桜の木やネモフィラなどを大切に育てているからこそ、その思いもひとしおだ。「全開の桜はもちろん、五分咲き

とか八分咲きとかの美しさってあるんですよ。その瞬間の形と色がそのまま生かせるんです。自家栽培だからキレイだし感動しますよね。やっぱりそういう努力はしないとね」。プロポーズの時にもらった花や結婚式の花束をそのまま残したい、という依頼が来たときは、お客様からは「美しさに感動した」という手紙が届くこともあるそう。花が好きだからこそ、美しさを引き出すよう丁寧な仕事をする。大変な作業だが、涼子さんにとっては自然なことなのだ。

『楽しい』のアンテナが向く方へ

花が好き、というだけでここまで行動できる涼子さんだが、惹かれるものはそれだけに留まらない。散歩に出れば周りの草花を観察するし、教室で年の離れた友達と話したり、アートやドラマを見るのも好きだそう。

「好奇心って人によっては失うでしょう。自分で毎日を楽しみたいと思うから、ポジティブでいたい。旅先でも工芸作家に話しかけたり、若い人に話しかけたりするんです。質問すると笑顔で応えてもらえるし、自分にとっては勉強になるんですよ」。

とはいえ、コロナ禍では遠方でのレッスンもなくなって涼子さんも苦しい時を過ごした。今は月に1日の教室とネットショップを運営しながら、ボトルフラワーの正しい知識の



普及に努めている。

「コロナ禍以降は、また一からの出直しだと思ってます。生徒は減ったけど、オンラインレッスンとかネットショップは頑張りたいですね。まだ学ぶことがたくさんあるからですね。歳は取ったけど、オンライン決済やSNSで社会も便利になったのに、使わないと勿体ないですか」。年齢で臆するようなこともなく、あくまで自分らしく前向きに。涼子さんは好奇心を原動力にして、これから先も『楽しい』がある方向へ突き進んでいく。

【ピンセットや竹串】

シリカゲルで生花を乾燥させるときや、作品として組み立てるときは、ピンセット等を使います。花は繊細ですからね。ボトルフラワーを組み立てる時が一番楽しいですね。



わたしの情熱の源泉